
ヒナギクは赤き昆虫ライダー～ワーム最強ライダー軍 地球征服の旅～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギクは赤き昆虫ライダー〜ワーム最強ライダー軍 地球征服の旅〜

【Nコード】

N8288K

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

七年前に落下した隕石から起きた最悪だけど楽しい結末。ワーム最強ライダー軍、ただいま見参！

(前書き)

仮面ライダーカブトを土台にハヤテのごとく!で地球征服をしたら
どうなるかを考えて書いてみました。
ワーム最強ライダー軍に以下を起用。

ヒナギク (キュレックスワーム) || カブト
アテネ (ベルクリケタスワーム) || ザビー
ヒナギク (人間) || ドレイク
歩 (スコルピオワーム) || サソード
ハヤテ (人間) || ガタツク

本編へどうぞ

西暦千九百九十七年。現在より七年前の渋谷に巨大な隕石が落下し、一帯は壊滅した。

隕石が招いたのは、それだけではなかった。

その日からワームという隕石に乗ってやってきた地球外知的生命体が、人々を襲い、擬態能力でその人間そっくりの姿になり社会に溶け込みつつ侵略活動始めていった。

事態を重く見たミカド・ハイパー・エナジーはネイティブというワームと敵対している地球外知的生命体の協力でマスクドライダーシステムの研究を始めた。そして七年の歳月が経った二十四年、遂にシステムは完成した。だが、システムが活躍する前に、ワームにそれを奪われてしまったのだ。

関係者らは絶望した。七年の苦労が水の泡となってしまったのだから……。

ある夏の夜。閑静な住宅街を一人の男が歩いていると、緑色の人間ではない者が現れた。その容姿からして怪物。

「何だお前？」

ワームというその怪物は男を襲い、殺害したその男そっくりに変身してニヤリと笑みを浮かべた。

そこへ木刀を持った桃色長髪に金の髪留めをした少女がやってきた。

「また？」

男に化けたワームは振り返った。

「お前だってそうだろう」

「まあね」

「じゃあ俺は行くな」

「気を付けて。この辺、組織の奴らが多いから」

「ああ、分かった。じゃあな」

男は去っていった。

少女は死体を見据える。

目の前の肉の塊は、先ほどの人間ではなく、緑色の怪物になっていた。どこから見てもワームであるが、頭部が微妙に違った。

「おい、そこで何をしている？」

後方数メートルに懷中電灯を手にした交番の巡査が現れた。

「やっぱ！」

少女は慌ててその場を去った。

巡査は少女が立っていた場所に駆け寄った。

そこで巡査は怪物の死骸を見つける。

「これはワーム！？ まさかあの子が……」

巡査は少女が走り去っていった方向を見た。

住宅街に建つ一軒の家。表札には桂と書かれている。

今、その家に一人の少女がやってきた。

「ただいま」

門を抜けドアを開けて中に入ると、若い女性が立っていた。

「ヒナちゃん、こんな時間にどこへ行ってたの？ 部屋に居ないから心配したじゃない」

「ちよっと急用があって。お義母さんは仕事は？」

「これから行くわ」

「そう。怪物が彷徨^{うろつ}してるから気を付けてね」

「ヒナちゃんの方こそ大丈夫なの？ ワームという怪物は人間とすり替わってるっていうじゃない。ひょっとしてヒナちゃん、ワーム？」

「お義母さん、どうしてワームのことを？ まさか……！？」

女性がワームに変貌した。

「なっ!？」

奥からもう一匹のワームが現れた。

「私の子がヒナちゃんに擬態したいって」

ワームの上に重なった女性の幻体がそう言う。

少女は木刀を構えた。

「人間が私たちに適うとでも？」

「本物はどこ？」

「知ってどうするの？」

「助けるわ」

女性だったワームの体が熱を帯びて真っ赤に変色した。

体が二つに割れ、中からグレーに赤の縞模様が入った蜘蛛型の怪物が出て来た。

アラクネアワーム・ルボアというその怪物が、左右の腕についた消化液の入ったウェブシューターから蜘蛛の糸を飛ばして少女を絡め捕った。

その時、扉が開け放たれて少女と同じ顔を持つ少女が現れた。

桃色の長い髪に金の髪留めをした端正な顔立ちで胸がぺったんこの少女。

「残念だったわね。本物はこっち。その子は私に擬態させたワーム。それと地の文、後で覚えときなさいね」

はい、全力で忘れさせていただきます！

「覚えときなさい。そして話を進めなさい」

新たに登場した少女が飛来した木刀を手にした。

「でももう用済み」

「え？」

少女がもう一人の自分の背中に木刀を突き刺した。

「うっ！」

倒れるもう一人の自分。

「貴様よくも！」

アラクネアワーム・ルボアが少女に襲いかかる。

少女は木刀で攻撃をガードしてルボアを蹴り飛ばした。

地面を転がるルボア。

「お義母さんはどこ？」

「殺した」

その言葉に怒りを覚えた少女は木刀を投げ捨て、代わりにベルト
と思しきものを取り出して腰に装着した。

「それは！」

虫の羽音と共に赤くて大きなカブトムシが飛来して少女の手に収
まった。

「貴方はお義母さんを殺した。ならこの私、桂 ヒナギクは貴方を
消すわ」

ルボアは目にも留まらぬスピードでヒナギクに襲いかかるが、ひ
らりとかわされてしまう。

「クロックアップした我々が見えるのか!？」

ヒナギクはカブトムシを腰のバックルに合体させた。

「変身」

〔H e n s h i n 〕

そのマシンヴォイスと共に、ベルトを基点に黒いスーツと白銀の
装甲と仮面が少女の体を包み込んだ。

それはミカド・ハイパー・エナジーが七年掛けて開発した盗まれ
た筈のマスクドライダーシステム初号機だった。

「それをどこで手に入れた!？」

カブトと名付けられたそのシステムは無言でルボアに攻撃を仕掛
ける。

ルボアは超高速移動でその場を立ち去った。
クロックアップ

カブトは家の中に居るワームを見やる。

ワームは逃げ出そうとするが、カブトが斧を手に駆け寄り、寸前
で空中前転をして刃を叩きつけた。

必殺のかぶとわりが決まり、ワームは緑色の体液が飛び散ると同
時に爆裂霧散した。

バックルからカブトムシが外れ、ヒナギクの姿に戻るカブト。

ヒナギクは倒れているもう一人の自分を見据えた。

「いつまで寝てんの？」

「バレた？」

起き上がる少女。

「あれぐらいで貴方が死ぬわけないでしょ」

「有り難う、もう一人の私。でも何で自分の仲間を？」

「仲間じゃないわよ、今のは」

「どういうこと？」

「今のはワーム。私たちネイティブと敵対している侵略宇宙人よ」

「種類があるの？」

「ええ、あるわ。ワームが来たのは七年前だけど、ネイティブはもつと昔。三十五年前にやってきたの」

「そうなんだ」

「じゃあ私は行くね」

ヒナギクは家を出て行く。

少女は二階へと上がっていった。

ある朝、女の子のような顔をした水色短髪の少年が杉並の地を支配する白き学び舎に――

「あの、普通に白皇学院って言っていただけますか？」

白皇学院に登校すると、校庭に立ち並ぶ幾つかの木のうち的一本の上にヒナギクが立ち往生していた。

「怖くて降りれないんですか？」

「ちようどいいところに来たわ。飛び降りるから受け止めて」

ヒナギクはそう言うと、少年が身構える前に飛び降り、顔面に着地した。

「うわっ！」

バランスを崩して倒れる少年。ヒナギクはその上から飛び退いた。

「何で受け止めてくれないのよ!？」

「いきなり言われても準備ってものが」

「私が木の上に居たら直ぐに構える。これ鉄則」

「そもそも登らなければいいだけの話じゃないですか」

「仕方なかったのよ! だってあのチャー坊が落ちちゃってたんだから」

ヒナギクは木の枝に作られた雀の巢^{すずめ}を指差した。

「登らないで僕を呼べばよかったじゃないですか」

「呼べば必ず来るの?」

「ヒナギクさんのためならどこへだって」

「ハヤテくん……」

「あ、そうだ。あの、ヒナギクさん」

「え?」

「昨日は誘ってくれて有り難う御座います。お陰でいい休みになりました」

「何のこと?」

「忘れたんですか? 昨日、僕とデートしたじゃないですか」

「で、でで、デート!?! 私そんなことしたの!?!」

「舞浜の遊園地で」

「そ、そうだったわね」

（あの子、ハヤテくんと）

「それで、あの返事なんですが」

（あの返事?）

「気持ち嬉しいですけど、僕には好きな人が居るんです。この学校の理事長なんですけど。ですから、ヒナギクさんとはお付き合い出来ません」

「……………」

ヒナギクの顔が曇る。

「ちよっと付いてきて」

「はい」

少年はヒナギクに連れられて旧校舎の前に来た。

「ここなら誰にも見られる心配はないわ」

「はい？」

「貴方は私の物」

「僕は誰の物でもありませんよ」

「いいえ、今から私だけの物になるの」

ヒナギクはニヤリと笑みを浮かべ、蚊を彷彿させる臙脂色のキュレックスワームに姿を変えた。

「ヒナギクさんがワーム！？」

キュレックスワームは少年に歩み寄る。

少年は懐からZECTゼクトという対ワーム組織が開発した銃を取り出して構えた。

「そんなものでどうしようっていうの？　ハヤテくん」

少年の手が震える。

「貴方には撃てないわよ」

（ヒナギクさんは僕の大切な親友。それを撃つなんて僕には……！）

少年は手を降ろすと同時に銃を落とした。

キュレックスワームは左腕の棘を少年の体に突き刺した。

「ぐっ……！」

キュレックスワームの中で作られたウィルスが少年の体内に侵入する。

棘を抜き、ヒナギクの姿になって言う。

「私にかしずけ」

少年はその場でひざまずいた。

「私の彼氏ナイトになりなさい」

「はい、仰せのままに」

ヒナギクは北叟ほくそ笑んだ。

昼休み。時計塔ガーデンゲートの最上階にある生徒会室でヒナギクが生徒会の書

類と格闘していると、下僕の少年がやってきた。

「ヒナギク様、カレーパン買ってきました」

ヒナギクは手を止めると、差し出されたカレーパンを受け取った。

「少し遅いんじゃない？」

「すみません。物凄く混んでたもので」

ヒナギクは少年が持っている物を見やる。

「それは？」

「これですか？ 僕のお弁当です。アーたんが作ってきてくれたんです」

ヒナギクは少年の手から弁当箱を奪うと、代わりカレーパンを収めた。

「交換しましょう。こっちの方が満腹になるわ」

「そんな……」

「不服なの？」

「いえ、そんなことはありません！ カレーパンが食べられてとても嬉しいですよ！」

「無理しなくていいのよ」

「はい、では弁当を返して下さい」

「どうしようかしら」

「それは僕の彼女からの弁当です！ 返して下さい！」

「気に入らないわ」

「はい？」

「天王州さんが貴方と付き合ってることが気に入らない。だからこれは私が食べる」

ヒナギクはそう言って少年の弁当を食べ始める。

「ダメ！」

少年は弁当箱を奪還した。

「ハヤテくん、それをこっちに寄越しなさい」

手を差し出すヒナギク。

「嫌です！」

「私の命令が聞けないの？」

「いくらヒナギク様の命令でもこれは渡せません！ それから……」
ハヤテという少年がヒナギクから箸を奪還してカレーパンを机に置いて踵を返すと、彼女が立っていた。

「あれ！？」

ハヤテは後ろを振り返った。しかしそこにヒナギクの姿はない。

「超人的な肉体を持ってるから貴方もワームかと思ったけど、ただの人間だったのね」

「今のがクロックアップですか？ 速すぎて見えませんでした」

「それを超越しなさい」

「何度言われても嫌です！」

「そんなにターザンが大事？」

「アーたんです。母音しか合っていないじゃないですか」

「五月蠅いわね。兎に角超越しなさい」

「嫌です！」

ハヤテはヒナギクを蹴り飛ばす。

「うわっ！」

ヒナギクは尻餅をついた。

「餓鬼が！ お尻ペンペンしないと分からないようね！」

ヒナギクは飛来した木刀の正宗を手に襲いかかった。

ひらりとかわすハヤテ。だが、足を滑らせて転倒した拍子に弁当が手から放り出されて床に中身が散らばった。

「私の弁当が……」

「僕のですよ！」

「貴方が私に逆らうからこうなったのよ！」

「そんなにお弁当がいいなら僕が作ってきます！」

「そういう問題じゃない！ 貴方が天王州さんから弁当をもらうのが気に入らないのよ！」

「何ですか！？」

「今すぐ天王州さんに別れを告げて来なさい！」

「嫌いになったわけでもないのに別れるなんて出来ませんよ!」
「お黙り!」

ヒナギクに蹴られたハヤテが壁にぶつかった。

「くっ……」

悔しそうな顔でヒナギクを見据える。

「やられて悔しいなら反撃すれば?」

ハヤテは立ち上がると、ヒナギクの顔面に殴りかかった。

「痛!」

ヒナギクが唇に触れると、その手に緑色の血液が付着した。

「ワームって緑なんですね」

その時、部屋の扉が開いて金髪縦ロールの少女が入ってきた。

「ハヤテ、いつまで待たせるんですの!?! 一緒に食べるって約束したんじゃない? っていうかこの殺伐とした状況は何ですの!?!」

「アーたん!」

ハヤテが少女の後ろに隠れた。

「アーたん、僕のこと好き?」

「この状況で貴方は何を言ってるんですの!?!」

「どうなの?」

「もちろん大好きに決まってるじゃありませんか」

「じゃあヒナギクさんを何とかしてくれない?」

少女はヒナギクを見やる。

「貴方、私わたくしのハヤテに何をしたんですの? 事と次第によっては赦しませんわよ」

「ハヤテくんは私の物よ。そうでしょ?」

「ええ、まあ……」

「ハヤテ!」

少女のアホ毛がハヤテの頭をつつく。

「いてて! 前から気になってたんだけど、アーたんのそれどうなってるの!?!」

「畑さんに聞いた方が宜しいんじゃない?」

「Twitterで畑さん宛てに呟いてみたけど回答無かったよ」

「それはいいとして、私のハヤテにちょっかい出さなくてももらえます?」

「好きな男の子にちょっかい出して何が悪いのよ!」?

「ハヤテは誰にも渡しませんわ!」

少女はそう言うのと、鈴虫を彷彿させる茶色のベルクリケタスワームに姿を変えた。

「うわあ!」

驚き飛び退くハヤテ。

「アーたんもワームだったの!」?

「怖い?」

「成る程。羽を擦り合わせることによって発音鏡から発生した攪音波催眠でハヤテくんを支配していたのね」

「ご名答。よく分かりましたと褒めて差し上げますわ」

ベルクリケタスワームはそう言うのとヒナギクに襲いかかった。

ヒナギクは攻撃をかわすとキュレックスワームに変態した。

「何!」?

攻撃しようとしていたベルクリケタスワームは既のところで手を止めた。

「天王州さん、やめて。私たちは仲間でしょ?」

二体のワームは元の姿に戻った。

「貴方、ハヤテにウィルスを?」

「ええ、彼が欲しかったから」

天王州 アテネという少女とヒナギクはハヤテを見やる。

「何ですか?」

「ハヤテは確かZECTに勤めていたわね」

「そうなの?」

「そして私たちの仲間の多くを殺してきたマスクドライダーシステム五号機ガタツクの資格者でもある」

「ハヤテくんが!？」

「ハヤテ、貴方はZECTがどんな組織か分かってますの?」

「ミカド・ハイパー・エナジーが立ち上げた地球を侵略しようとするワームたちを殲滅する秘密組織、でしょ?」

「違うわ」

「え?」

「ZECTは三十五年前に地球に侵入したネイティブが地球を侵略するために立ち上げた組織よ。騙されないで」

「嘘だ! ワームは今まで沢山の人間を殺してきたじゃないか!」

「あれはネイティブを誘き出すために仕方なく」

「そんなの僕は信じてないぞ!」

「残念だけどこれが真実なのよ」

「ハヤテくん、私たちと一緒にZECTを潰しましょう?」

「断る!」

ハヤテがベルトを取り出して腰に装着すると同時に大きな青いクワガタムシが飛来した。

「変身!」

ガタツクゼクターというそのクワガタムシをベルトに接続するハヤテ。

〔H e n s h i n〕

システムが起動し、ハヤテの体を黒いスーツと白銀の装甲が覆い、ガタツクマスコドフォームへの変身が完了する。

「口で言っても分からないようなら体で覚えてもらうわ」

ヒナギクはベルトを装着すると飛来したカブトゼクターというカブトムシ型のメカをバックルにセットした。

〔H e n s h i n〕

システムが起動してヒナギクをカブトマスコドフォームに変身させる。

「カブト! まさか貴方が盗んだんですか!？」

「盗んだとは人聞きの悪い」

「うわああああ！」

ガタツクは雄叫びを上げながら両肩のガタツクバルカンというガトリングガンから無数の弾丸をカブトに発砲する。

無数の弾丸を全身に受けたカブトが火花を散らす。

「桂さん！」

ガシャン！——カブトはゼクターの角を左手の親指で起こした。

キューンピュピュピュピュピュ……ドボン！——という擬音と共にカブトの白銀の装甲が浮かび上がり、内側の赤いライダーアーマー顔を出した。

「キャストオフ」

右手でゼクターの角を展開。

〔Cast off〕

電子音が発声し、マスクドアーマー白銀の装甲がガタツクめがけて勢い良く弾け飛び、彼を吹っ飛ばした。

「うわあ！」

壁に激突するガタツク。

ライダーフォームへの移行の第一段階が完了したカブトの顎のローテートを基点に彼女のカブトホーンという角がグイーンと自動的に起き上がり、コンパウンドアイ青の複眼が白く発光した。

〔Change beetle〕

その電子音と共に脱皮が完了。カブトムシの背中を象った赤い装甲と仮面が露わになった。

「くそっ！」

立ち上がったガタツクがゼクターの角に指をかける。

「そうはさせないわ！」

カブトは右手でサイドバツクルを叩いた。

〔Clock up〕

その瞬間、カブトの姿が消えると同時にガタツクの体が宙に舞い上がって傷だらけになった。

〔Clock over〕

落下するガタツクの前に出現したカブトがゼクターのフルスロットルという三つのボタンを順番に押す。

「One two three」

ゼクターホーンを反対側へ倒してパワーをチャージ。

「ライダーキック……」

そう呟いてゼクターホーンを戻す。

「Rider kick」

その電子音と共にタキオン粒子を集めた右足で強力な回し蹴りを落下するガタツクに叩き込んだ。

「ぐわっ！」

ガタツクは吹っ飛んで壁にぶつかり、床に落下してゼクターが外れ、変身が解けてしまった。

「この僕がワームごときに……！」

「まだ抗おうっていうの？ いい加減に諦めて私に忠誠を誓いなさい」

「ハヤテ、このままでは貴方を死なせることになりますわ」

「くっ……！」

苦虫を噛み潰したような表情をするハヤテ。

「私はハヤテにそうなって欲しくありません。だから協力して欲しいのです」

「彼、私たちの能力に抵抗してるわね」

「もつと痛い目にあわせなきゃダメかしら」

アテネはハヤテの胸倉を掴んで無理矢理立たせた。

「歯を食いしばりなさいハヤテ！」

アテネはハヤテの腹に膝を思いっ切り埋めずめた。

「がはっ！」

血を吐くハヤテ。

「アーたん……、君は最愛の人を殺すのか……！？」

「別に殺しはしませんけど、いい加減落ちなさい！」
再びアテネの膝蹴りがハヤテの腹に埋めずまる。

「がはっ！」

血を吐き出すハヤテ。

アテネの膝蹴りはまだまだ続く。

「ぐはっ！」

やがてハヤテの視界はぼやけ。

「これで最後ですわ！」

ハヤテの胸ぐらを掴んだまま飛び上がったアテネが彼の体を床に叩き付けた！

二、三回バウンドして遂には意識を失うハヤテ。だがそれでも彼は立ち上がる。その瞳は漆黒に染まっていた。

東京の一角に建てられた秘密組織ZECT。この組織はミカド・ハイパー・エナジーにより設立されたものである。

「いよいよ作戦開始ね」

「作戦はこうですわ。先ずハヤテが中に入って暴れる。そして混乱しているところを私たちが叩く」

「だから、そんな簡単な作戦何度も言われなくても分かるわよ」

「兎に角動きましようよ二人とも」

「行動開始よ」

「イエッサー！」

建物へと入っていくハヤテ。

「ハヤテくんが暴れればネイティブたちはきっと彼を止めにくる。

その間に私たちが——」

「私たちが何だ？」

何者かに言葉をかき消されたヒナギクはその声の主へ振り向いた。

「お前たちはワームだな？」

「貴方は？」

「俺はこの人間だ。お前たちがやってきたということぐらい承知している」

「それでどうしようというんですの？」

「お前たちがワームならば俺はお前らを殺す！」

目の前の男はそう言うのと右手を掲げ、飛来した蜂型のゼクターを掴む。

「ザビーか。雑魚ね」

「何!？」

男はザビーゼクターを左腕のライダーブレスという腕輪に取り付けた。

「変身！」

〔Henshin〕

システムが起動して男の体を瞬時にスーツと装甲が包み込み、ザビーマスクドフォームに変身が完了した。

「貴方の相手にはこいつらで十分ですわ」

アテネが言うのと手下のサナギワームが数体現れた。

「キャストオフ！」

ザビーがゼクターのリング状のゼクターウイングを展開すると装甲が浮き上がった。

「クロックアップする前に倒すのですわ！」

ザビーは今度はゼクターを半回転。

〔Cast off〕

マスクドアーマーが弾け飛んでサナギワームの数を確実に減らした。

〔Change wasp〕

脱皮が完了してスズメバチを彷彿させるライダーフォームの姿が露わになった。

「私の可愛いシモベたちが……！」

殺された手下たちのために怒りを露わにしたアテネがベルクリケタスワームへと変態した。

「ついでにそのシステムをいただくわ、スズメバチさん」

ベルクリケタスワームは徐にザビーへと間合いを詰める。

「木偶の坊になりなさい」

ベルクリケタスワームが背中の羽を擦り合わせて発音鏡から攪音波催眠を放った。

その影響で体が動かなくなるザビー。

「恐怖で体が硬直？ そんなんでZECTの隊員が勤まるのかしら？」

「その羽を擦り合わせる行為をやめろ！ お前の厄介な能力は分かっている！」

「だったらなぜ私たちに戦いを挑んだのかしら？」

「俺はライダーだ！ ワームは残らず殲滅する！」

「知ってる？ ZECTの中にも少なからずワームは居るのよ。そういったら倒さなくていいの？」

ザビーに手が届く距離まで来たベルクリケタスワームが彼を殴り倒した。

「ネイティブのことだろ？ 奴らは俺たち人間の味方だ！」

「そう思ってるのは貴方だけよ。今、ハヤテ……ガタツクの資格者が反旗を翻して乗り込んだわ」

「どうせお前が操ってんだろ？」

「ご名答。貴方も人形にしてあげましょうか？」

「そうは行くか！」

ザビーは何とか手を動かしてバックルのトレーススイッチを入れた。

Clock up

超高速でベルクリケタスワームに襲いかかるが、彼女もクロックアップで応戦。

カン！——胸部に銃撃を受けて火花が散った。

「ああ？」

ザビーは狙撃手へ振り向く。その先にはゼクトクナイガンという銃と斧が一体となった武器を構えたカブトが立っていた。

「カブト！」

ザビーはベルクリケタスワームを放置してカブトへと迫る。

〔Cast off〕

カブトはゼクターホーンを展開し装甲を吹っ飛ばしてカブトホーンを起立させた。

〔Change beetle〕

「クロックアップ」

〔Clock up〕

サイドバックルを叩いてクロックアップしたカブトがザビーの連続攻撃を華麗にかわして反撃に出る。

「はっ！ はっ！」

重い拳攻撃を受けて怯むザビー。

更にカブトの強力な蹴脚。ザビーは地面に転がった。

「大したことないわね。それでライダーのつもり？」

そこに一台のママチャリが現れてカブトへ突っ込む。

「きゃあ！」

撥ねられて勢い良く吹っ飛ぶカブトは空中でママチャリに跨る人物を見やった。

「なっ！？」

地面に落下するカブト。ママチャリの運転手の姿に驚きを隠せないでいた。

「セバスチャン、何手こずってるのかな？」

「歩！？」

その人物は親友の西沢^{にしざわ} 歩^{あゆむ}だった。

「お嬢様、こんなところで何を？」

「それはこっちのセリフなんじゃないかな？ いったいこれはどういうことなの？ 何でライダー同士で戦ってるのかな？」

「奴はワームだ」

「ワーム……」

歩は紫色の剣型ツールを取り出した。

〔Standby〕

地面から紫のサソリ型ゼクターが現れて歩の手に収まった。

「ワーム相手なら私も混ざりたいんじゃないかな？ 変身かな!？」
歩はゼクターをツールに取り付けた。

Hen shin

システムが起動すると歩の体は黒いスーツに茶色の装甲と仮面に包まれた。

「キャストオフ！」

サソードというそのライダーがゼクターのニードルを押し下げた。

Cast off

装甲が弾け飛び、紫の戦士がその姿を現した。

Change scorpion

「天王州さん、相手をしてあげて」

「分かりましたわ」

ベルクリケタスワームがサソードへ接近する。

「はあっ！」

サソードはサソードヤイバーという剣型の武器で攻撃する。

「くっ……！」

剣攻撃を受けて火花が散るベルクリケタスワーム。

「天王州さん、呉々も殺さないように」

「どうして？」

「歩は親友なのよ」

サソードの動きが止まる。

「その声はヒナさん？」

「よそ見なんかしてる場合じゃなくて!？」

ベルクリケタスワームがサソードを殴り飛ばした。

「きゃあ！」

カブトの前に落下するサソード。

「ヒナさん、ワームだったんですか？」

「それより聞いて、歩」

「何です？」

「今この地球はネイティブという奴らに狙われているの。私たちがワームはそのネイティブの悪事を阻止するために派遣された宇宙警察なのよ。協力してくれないかな」

「お嬢様、ワームの言葉に騙されてはなりませんぞ」

「セバスチャン、ヒナさんは嘘吐かないわよ」

カブトの仮面の下でヒナギクが北叟笑む。

「ヒナさん、私もヒナさんに協力します。一緒に悪者を退治しましょう」

「そうしてくれると助かるわ」

そう言ったカブトと同時にサソードが立ち上がる。

「先ずは彼を」

カブトはザビーに顔を向ける。

「セバスチャンをどうするの？」

「彼はネイティブに味方をしている悪人よ。ライダーシステムを没収しましょう」

二人の下にベルクリケタスワームがやってくる。

「騙されやすい子なのね」

「聞こえるわよ」

「ごめんなさい」

サソードが振り返った。

「何か言いました？」

「いえ、何も言っていないわ」

「システムを奪いますわよ」

三人はザビーへと接近した。

立ち上がり様に逃げ出そうとするザビーの前にベルクリケタスワームがクロックアップで先回りして攻撃する。

「ぐっ……!!」

更に背後からカブトのクナイとサソードのサソードヤイバーによる斬撃。

「うわっ!!」

倒れて変身が解けるザビー。

「ライダーブレスを渡せば命だけは助けてあげるわ」

「お前たちに渡してたまるものか！」

「うわああああ！」

ガタツクが男の上に落下してきた。

「ぐふっ！」

男は気を失ってしまった。

「何が遭ったの？」

「くっ……ZECT最強のライダーが……！」

ガタツクが言うとうと黄金のライダーが現れた。その名はコーカサス。名前からしてコーカサスオオカブトムシであるのは間違いないようだ。

「熱烈歓迎ね！」

最強の二文字にテンションが上がるカブト。

「冗談じゃありませんよあんなの！ 早く逃げましょう！」

「その声はハヤテくん？」

その問いにサソードを見るガタツク。

「ひょっとして西沢さんですか？」

その傍らでカブトが男からライダーブレスを外してベルクリケタスワームに渡した。

「ハヤテくんもライダーだったんだね」

ガタツクは立ち上がりコーカサスを見る。

「おい、今ハヤテと言ったか？」

「……………」

構えるガタツク。

「久し振りだなハヤテ」

「その声……ひょっとしてイクサ兄さん？」

「お前、ワームに加担するのか？」

「この方たちは僕の大切な仲間なんだ！ だから僕はこの方たちに協力する！」

ベルクリケタスワームがアテネの姿になって前へ出た。

「お前はあの時の!？」

「ご無事で何よりですわ。お礼にお宝をプレゼンと致しますわ。地獄という名のね」

そう言ってアテネがライダーブレスを左腕にはめると、ザビーゼクターが飛来した。

「うっ……!」

胸に激痛が走りその部分を手で押さえるアテネ。

「アーたん大丈夫？」

「心臓が悪いのかな？」

「ちよつとごめんね」

ガタツクがアテネの胸を覗いた。

「これは!」

頬を赤らめたアテネのそこにはザビーのマークが刻まれていた。

「どうやらザビーゼクターがアーたんを選んだみたいだよ」

「ハヤテ——ッ!」

無許可で胸を見られたことによる怒りでガタツクの顔面を殴るアテネだったが、彼にダメージを与えることは出来ず、逆に自分が拳を痛めてしまった。

「くっ……!」

あまりの激痛にアテネは涙を浮かべる。

「何で泣いてるの？」

「ハヤテのバカ!」

「え？」

「ハヤテくんはデリカシーが無いんじゃないかな!？」

「女の子の胸が見たくたってまともな人ならしないわよ」

「いいですわ、桂さん。これは私がいけないんですの。小さい時に私がハヤテと一緒に風呂に入ったりしていたからこんな人になってしまったのよ」

「い、一緒にお風呂なんて天王州さんが羨ましいわね。私もハヤテ

くんと入りたいわ」

「ちよっとヒナさん!？」

「歩は入りたくないの？」

「私も入りたいですけど、そう言うのは人としてどうかと思うんです」

「じゃあこの計画が終わったら皆さん一緒に入りませんか？」

「は、ハヤテがそんなに私の裸を見たいと仰るなら一緒に入ってあげても構わないですよ」

「私も勇気を出すわ! 入らなかったら負けた気がするし!」

「えっ!？ それじゃあ私も一緒に入ろうかな!？」

「それじゃあ頑張ってあの黄金のライダーを倒しましょう」

「「「オー!」」」

四人はコーカサスと向き合う。

「お前たちが俺に勝てる筈が無い。覚悟しろ」

「それはどうかしら？」

アテネはザビーゼクターをライダーブレスにセットしてザビーに変身し、直ぐにキャストオフした。

四人は一斉にコーカサスへ向かっていき袋叩きにする。

グロッキーに陥ったコーカサスは助っ人を呼んだ。

白いカブトムシ型のハイパーゼクターが飛来してコーカサスの手に収まる。

「これでお前たちを葬ってやろう」

コーカサスはゼクターを左のバックルに装着。スラップスイッチを叩いた。

Hyper clock up

その瞬間、コーカサスの姿が消えて四人の体が宙に舞い上がった。

「高いのダメ——ッ!」

そして地面に叩きつけられると同時にコーカサスが出現する。

「速すぎてついていけないんじゃないかな!？」

「クロックアップより速いなんて……!」

「あれがハイパークロックアップ」

「あの……一つよろしいですか？」

「「こんな時に何!？」」

「実はもう一人、ドレイクというライダーの資格者が居るんですが……」

「ドレイク？」

「トンボさんです」

「それ誰なの？ まさかマリアさんとか？」

「いや、誰かは分からないんですけど、さっきその人にメールを出しておきました。そろそろ来るころだと思います」

その時、エンジン音と共に一台のバイクが彼らの前に現れた。

「全く、だらしないわね」

バイクから降りた人物がヘルメットを脱ぎ去ると、その下からヒナギクの顔が出て来た。

「ヒナさんが二人!？」

「どういうことですか!？」

「ちゃんと説明しなさい」

「彼女は私のオリジナルよ」

「何で殺してないんですの!？」

「何度も殺そうとしたわよ!」

「殺すって、宇宙警察がそんなことしていいのかな!？」

「宇宙警察?」

疑問符を浮かべるオリジナルのヒナギク。

「知らないんですか？ ワームは地球を侵略しようとするネイティブを退治するためにやってきた宇宙警察なんですよ」

「はあ……貴方騙されたのね」

「へ?」

「彼らはこれからZECTを破壊して地球を征服するのよ」

「そんな!」

「本当よ」

「じゃあ貴方は何をしに来たんですか？」

「私もこの地球が欲しくなっちゃって。だから彼らに協力しよう」と
「そういうことなら私はあっち側に行きますよ」

サソードが立ち上がってコーカサスの下へ行こうとした刹那、急に苦しみ出した。

「来る！ あいつが来る！ どこに居るの！？」

変身が解けた歩の体がサソリを彷彿させる白銀のスコルピオワームの姿に変貌した。

オリジナルのヒナギクはドレイクグリップという変身に必要なツールを取り出すと、飛来したトンボ型のゼクターが自動的に取り付いた。

「変身」

〔H e n s h i n〕

そのマシンヴォイスと共に黒いスーツに装甲と仮面に包まれるオリジナル。

〔C h a n g e d r a g o n f l y〕

いきなりドレイクライダーフォームに変身したオリジナルがグリップに接続されたゼクターのヒッチスロットルを引っ張り銃口をスコルピオワームに向けた。

「目を覚ますのよ歩！」

〔R i d e r s h o o t i n g〕

引き金を引いて放たれた光弾がスコルピオワームに命中して吹っ飛んだ。

地面を転がるスコルピオワーム。

「あれ？ 私どうして……」

スコルピオワームは自分の体を改める。

「何よこの体！？」

「それが貴方の本来の姿、スコルピオワーム」

「スコルピオワーム……？」

「貴方は歩を殺して擬態した時に自分を忘れてしまったのよ」

「私がワーム？」

「無理も無いか。貴方はずっと歩の姿で居たから、歩としての自我が強く残ってる。でもワームであることは受け入れなきゃダメよ」

「……分かりました。私もワームとしてこの地球を征服してみせます」

「そのいきよ」

スコルピオワームは歩の姿になると、再びサソードに変身した。

「さて、役者が揃ったところで反撃開始よ！」

カブトが立ち上がると、ザビーとガタックがそれに続いた。

「僕は兄さんを倒して地球を征服する！」

「雑魚が何人増えようと俺の敵ではない！」

「それはどうかしらね」

カブトが言うのと五つのハイパーゼクターが空の彼方からやってきて、それぞれの手に収まった。

「バカな!？」

「遥か未来で私たちが作られたのね」

「行くわよみんな！」

五人のマスクドライダーはハイパーゼクターを左のバックルに取り付けてその角を倒した。

~~~~~Hyper cast off~~~~~

そのマシンヴォイスと共に五人の姿がハイパーフォームへとバージョンアップ。

~~~~~Change hyper beetle~~~~~

~~~~~Change hyper wasp~~~~~

~~~~~Change hyper dragonfly~~~~~

~~~~~Change hyper scorpion~~~~~

~~~~~Change hyper stag beetle~~~~~

そしてスラップスイッチを叩く五人。

~~~~~Hyper clock up~~~~~

五つのマシンヴォイスと共にクロックアップを凌駕する速度のハ

イパークロックアップでコーカサスに襲いかかる五人。

「くっ……こんなことが……！」

五人の容赦ない連続攻撃にコーカサスはついに動けなくなった。

「どどめですわ！」

そう言ってアテネがハイパーゼクターの角を倒すと、他の四人も同じ動作をした。

「Maximum rider power」

音声の後、ハイパーカブトとハイパーガタツクがフルスロットルを押す。

「One two three」

続いてハイパーザビーがゼクターのフルスロットルを押し、ハイパードレイクがヒッチスロットルを引いた。そして最後にサソードがゼクターニードルをプレス。

「ハイパーキック！」

「ハイパーステイング！」

「ハイパーシューティング！」

「ハイパースラッシュ！」

「Rider kick」

「Rider stinging」

「Rider shooting」

「Rider slash」

ハイパーカブトとハイパーガタツクの渾身の力を込めた跳び蹴り、ハイパーザビーのゼクターの先端による突き刺し、ハイパードレイクのゼクターから放たれた光弾、ハイパーサソードの激しい斬撃。それぞれの必殺技がコーカサスに炸裂した。

全ての必殺技をともに食らったコーカサスが大爆発を起こした後、立ち上る黒煙の中から額に十字傷のある男が姿を現し、脱力してその場に倒れ込んだ。

「行こう！」

五人はZECTの建物へ入っていった。

こうして組織は壊滅し、日本政府はワーム最強のライダー軍に全面降伏し、彼らと共に世界各国へ進撃し領土を広げていった。そして遂に地球は完全にワーム最強のライダー軍の手によって支配されてしまったのだ。

無論、地球上で全てを支配出来る権力を手に入れた彼らに逆らうものは皆殺されいった。

彼らは今でも手中に収めた地球で好き勝手に暴れているという。

東京の一角に建つ皇居にライダー軍は居た。

ここは以前まで天皇一家が住まわれていたのだが、彼らが地球を征服した後、彼らによって強制退去させられて居なくなってしまうのだ。

「一暴れした後は気持ちいいわね」

「そうですね」

食卓でお茶を飲んでいるオリジナルと歩。

リビングではハヤテがヒナギクとアテネに囲まれて何だか楽しそうだった。

「ヒナさんはハヤテくんのこといいんですか？」

「いいの。私ね、歩のことが好きなの」

「へ？」

「どうかな？」

歩は躊躇った。

「ダメ？」

「いえ、ヒナさんならいいです」

「歩」

「ヒナさん」

今ここにオリジナルと歩のカップリングが……

「冗談よ」

「へ？」

誕生しなかった。

「私は美希みたいにレズじゃないもん」

その時、どこかで生徒会の花菱<sup>はなびし</sup> 美希<sup>みき</sup>がくしゃみをしたのは別のお話。

「ひどい！ からかったんですね!？」

「私はハヤテくん一筋よ」

「じゃあ私はそんなヒナさんの心を奪っちゃいます」

「どうやって？」

歩は席を立つとオリジナルの下へ回った。そして彼女の唇を奪う。

「ん……!？」

離れる歩。だが今度はオリジナルが彼女にキスをした。

そこに二人の美少女に囲まれたハヤテがやってくる。

「二人とも、今からお風呂に入りませんか？」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8288k/>

---

ヒナギクは赤き昆虫ライダー～ワーム最強ライダー軍 地球征服の旅～

2010年10月8日10時35分発行